

新後撰廿 玉椿かはらぬ色を我世とて三上の山ぞときはなるべき 經 光

續拾八 雲晴るる三上の山の秋風にささ波遠く出づる月かげ 靜助法親王

玉十四 志賀の浦やしぐれて渡る浮雲に三上の山ぞ半かくる 不 知

千 十 常磐なる三上の山の杉村や八百萬代のしるしなるらむ 季 經

勅十九 遙なる三上の嵩をめにかけて幾瀬わたりぬやすの河波 後京極

席 田 美二 百八十四

續後拾六 席田のいつぬき川に垂氷ゐて宿る月にはしく物ぞなき 成 道

勅 七 席田にむれゐるたづの千代も皆君が齡にしかじとぞ思ふ 重 家

石上寺 大和 百八十五

新 六 石上名におふ寺の鐘の音に古くなる世をきくぞ悲しき 爲 家

長 居 美二 百八十六

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

新後撰五 あらし吹く伊駒の山の雲はれて長居の浦にすめる月影 國 信

印南野 美二 百八十七

後撰十四 狩人のたづぬる鹿は印南野にあはでのみこそあらまほしけれ 不 知

續古今十八 いなみのや山本遠く見渡せば尾花にまじる松のむらだち 土御門院

萬 七 家にして我はこひむな印南野の淺茅が上にてりし月夜を

萬 廿 印南野のあから柏は時はあれど君をあがもふ時はさねなし

那 智 美二 百八十八

風 木の本にすみける跡を見つる哉那智の高峯の花を尋ねて 西 行

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

續古七 那智の山遙に落つる瀧つせにすすぐ心の塵ものこらじ 同 院

鷺坂山 美二 百八十九

良 玉 限なき鷺坂山のつつじかな色てるまでにいま咲きにけり 好 忠



堀 百 白鳥の鷺坂山を越えくれば小篠が峯に雪ふりにけり 顯 季  
萬 九 白鳥の鷺坂山の木隠に宿りてゆかな夜もふけゆくを 人 丸

水無能川 常陸二百九十

續拾二 筑波根の嶺の櫻やみな川のながれて淵とちり積るらむ 雅 有  
新續古六 みな川の川峯よりおつる紅葉ばも積りて波を又やそむらむ 茂 重  
後撰十一 筑波根の嶺よりおつる水無能川戀ぞ積りて淵となりぬる 陽成院

像見浦 紀伊二百九十一

中務卿親王家歌合 別れなば波間に遠くゆく舟のかたみの浦の春の雁がね 隆 博  
續古十八 有明の空にわかれし妹が嶋かたみの浦に月ぞのこれる 太上天皇  
勅 六 風寒み夜の更行けば妹が島かたみの浦に千鳥なくなり 鎌倉右大臣  
萬 七 藻刈舟沖こぎくらし妹が鳥像見の浦にたづかけるみゆ  
續千十四 あふ事も今はかたみの浦波に遠ざかりゆく海士の釣舟 經 朝  
面影のほかにも残る妹が嶋これや形見の浦のもしほ火

寢覺里 美濃二百九十二

萬 代 風の音に驚かれてやわぎもこが寢覺里に衣うつらむ 伊勢大輔  
六 帖 獨のみ思ふは山の寢覺里ねざめて人をこひあかしつる

朝倉山付木丸殿 二百九十三

雲間よりよそにきくこそあはれなれ朝倉山の鶯のこゑ 俊 成  
花の色をあらはにめでば仇めきぬ朝倉山におりてとりけむ  
子規朝倉山のあけぼのにとふ人もなき名のりすらしも 成 仲

新續撰三

橋の木の丸殿の薫る夜はいはぬに名のる物にぞありける  
あとたれて幾代へぬらむ朝倉やみ山をてらす秋の月影 延 季  
續拾二十 朝倉や木の丸殿に我をれば名告をしつつ行くは誰子ぞ 天智天皇

床 浦 二百九十四

續古一 佐保姫の床の浦風吹きぬべし霞の袖にかかる白波 光 俊  
新拾十八 敷妙の床の浦わの海士小舟うきね定めぬ月やみるらむ 源頼遠



新千六 小夜更けて通ふ千鳥の聲すなり誰住む床の浦路なるらむ 爲子  
鴛鴦の夜床の浦のうき枕こほらぬ水のひまもとむらむ 爲經

御禊川 二百九十五  
未勘圖

續千三 み禊川瀬瀬の玉藻のみ隠れてしらぬ秋や今宵たつらむ 後鳥羽院  
雲 葉 み禊川ゆきかふ袖やふけぬらむ露ながらをる麻の一ふさ 同

名越山 二百九十六  
佐

萬 十 わがせこの名越の山の呼子鳥君呼返せ夜の更けぬとに 赤人  
後撰二 吹く風をなごしの山の櫻花のとけくぞみるちらじと思へば  
寶治百 六月のみ禊河原のかへるさに名越の山の空ぞあけゆく 朝氏

御船山 二百九十七  
大和

萬 秋霧にしととにぬれて呼子鳥み船の山をなき渡るみゆ 人丸  
新後撰二 瀧の上におちそふ波は嵐吹くみ船の山の櫻なりけり 重氏  
新千三 久方の雲の波こそ瀧の上のみ船の山の五月雨のころ 雅經

雁がねは御船の山やこえつらむかりかけたりと天つ聲する 惠慶

續後拾四 此頃は御船の山にたつ鹿の聲をほにあげてなぬ日ぞなき 俊頼

同 五 空きよき雲の波路をゆく月のみ船の山に秋風ぞ吹く 平齊時

玉 五 瀧の上のみ船の山の紅葉ばはこがる程になりける哉 隆源

津田細江 二百九十八  
播磨

後撰四 五月雨はつたの細江の落標みえぬも深きしるしなりけり 覺盛  
沖の浪津田の細江の浦がくれ風も吹くやととまる舟人 爲家

臈清水 二百九十九

玉十六 ひとりすむ臈の清水ともとては月をぞやどす大原の里 寂然  
續千三 螢飛ぶ臈の清水かすかにもしらはやおのがもゆる心を 國冬  
續後拾三 八重葎茂みが下にむすぶてふ臈の清水夏もしられず 匡房  
夫木八 稀にこし臈の里に住みなれて老は清水のしるしなりけり 丹後

千年山 三百  
丹後



萬代わが君のながれ久しき千年川波靜なる代につかへつつ 洞院攝政  
拾十年より千年の山は聲絶えず君が御代をぞ祈るべらなる 能宣  
千年山これや昔のさざれ石いはほに深き苔の色かな 中務卿  
峯つづき松のま茂く見ゆる哉これや千年の山路なるらむ 師時  
千載廿千年山神の代させる榊葉の榮えまさるは君がためとか 光範

追加

横川

風十八 古のながれの末をうつしてや横川の杉のしるしをもみる 爲家  
新續古十七 思出づる雲井の月の面影も横川の水にすましてぞみる 眞縁上人  
同十九 明け渡る横川の鐘の音はして雲の八重たつ峯ぞ夜深き 稱名院入道  
内大臣

芳野

六帖 梅の花咲くとしらでやみ芳野の風に友まつ雪はふるらむ  
新古一 花ぞみる道の芝草ふみわけて芳野の宮の春のあけぼの 季能  
同 み芳野の大川のへの古柳かげこそみえね春めきにけり 輔仁親王  
同十四 世をいとふ芳野の奥の喚子鳥ふかき心の程やしるらむ 幸清  
同 四 今宵誰すぞ吹く風を身にしめて芳野の嶽の月をみるらむ 頼政

三輪



六帖

三輪川の水堰入れて大和なるふるの早稲田は早苗とらむ

行家

小野

新後三

尋ねつる小野の篠原しのび音もあまり程ふる時鳥かな

内大臣

續拾四

蟲の音もわが身一つの秋風に露わけわぶる小野の篠原

俊成女

同

夕されば霧立つ空に雁なきて秋風寒し小野の篠原

少藁壁門院

新千四

浅茅生の小野の篠原いろづきて露霜さむみ鶉なくなり

前中納言

同

五 蜚聲よわりゆく浅茅生に小野の篠原秋ぞくれぬる

從三位顯氏

志賀

拾十

み禊する今日辛崎におろす網は神のうけひくしるしなりけり

平祐舉

いにしへの鶴の林にちる花の匂をよするしがの浦風

同

新後拾十

駒なべて打出の濱をみ渡せば朝日にさわぐ志賀の浦波

後鳥羽院

宇治

家集

雨ならで宇治の川波立増る志賀の浦風吹きやこすらむ 仲實  
眺めやる宇治の河瀬の水車とことにはこそ君はかけけれ 中務卿  
雪はるる木幡の嶺を眺めても宇治のわたりの人や待つらむ 小宰相

立田

古 二 花のちることやわびしき春霞立田の山のうぐひすの聲 俊 蔭  
新古五 立田山梢まばらになるままに深くも鹿のそよぐなる哉 俊 惠

美豆野

淀のなるみつのみ牧に放つてふ駒嘶ゆなり春めきにけり 惠 慶  
いたづらにかるる思ぞ朽ちぬべき願をみつの杜のしめ縄 行 能  
かり残すみつの真菰に隠るへて陰もちのほになく蛙哉 西 行  
山城のみつ野の里に妹をおきて幾度淀の舟よばふらむ 公 經

北野

我君の千世のためとや宮居して一夜の松も年をへぬらむ 源直氏

石清水歌合



新拾廿

木綿かけし神の北野の一夜松今は佛のみそぎなりけり 不知

北野には難波の草か生ひざらむ唯松のみぞ飾なりける 菅家

同

西になる北野の松の木のみより心づくしの月ぞ秋なる

同

松浦濁しばしの程の旅ならむ北野ぞ常の住居なりける

同

なき名にはいかなる人の沈むべき誓ふ北野の神の恵に

同

北野とは人のつけたる名なりけり誠のへうは是ぞ松岡

同

男山又八幡山

堀

百男山かざしの花も春なればをみの衣もはゆるなりけり 仲實

石清水歌合

八幡山神やきりけむ鳩の杖老いて榮ゆく道のためとか 家長

家集

とびかける八幡の山の山鳩のなくなる聲は宮もとどろに 鎌倉右大臣

屏風浦

近江

たてきる

か屏風の浦の春霞世にあふ坂の關こさじとて 源仲正

蓮

浦加賀

罪ふかき身は亡ぶやと音にきく蓮の浦をゆきてだにみむ

机嶋能登

萬十六

上野つくゑのしまのしだたみをいひろにもちきて下野

足占山丹後

ゆきゆかず聞かまほしきはいづ方に踏定むらむ足占山

時浦長門

思ひいづる時の浦にもうき人は忘貝こそ拾はれにけれ

草刈里河内

萬代

ふる川の入江のあしは霜がれて淋しくなりぬ草刈の里 中原師光

衣衣山末勸國

冬ごもり衣衣山をみ渡せばはるまもなく雪はふりつつ 好忠

嬰兒山同

わがごとやうきねはなくと時鳥嬰兒山にいりてこそきけ

方輿勝覽集



語 山 末勳 國

小夜ふけてかたらひ山の郭公ひとり寐覺の友ときく哉 肥 後

鞠 岡 同

遠近抄 鞠の岡何をかかりと思ふらむかたうつ波の音ばかりして 時 用 妻

鈴 野 同

雉子なく鈴野に君がみちすゑて遊びますらむいざゆきてみむ 俊 頼

田中杜 同

山ぎはの田中の杜に注連はへてけふ里人の神祭るなり 爲 家

真柴川 同

高嶺には雪ふりぬらし真柴河ほきの陰草たかひさりなる 公 長

笛竹池 同

笛竹の池の堤は遠くともこちへといふ事を忘れざらなむ

片削入江 同

萬 代 葦そよぐ汐風さむみかたそぎの入江に傳ふあぢの村鳥

琴 浦 同

松風に波のしらぶる琴の浦は鷗の遊ぶところなりけり 仲 正

伏猪嶋 同

誰しかもみて忍ぶらむ刈藻かく伏猪の島の秋の夜の月

鶉 濱 玩前

懐 中 かりにとは思はぬ旅もいかなれば鶉濱をば行暮すらむ



後水院御撰千首和歌

春

歳内立春

後柏原院

玉つばき年にふたたび新玉の春のかけ見る花も咲かなむ  
立春

なべて世の力をもいれず浪風を四方に治めて春やたつらむ  
道遙院内大臣

野も山も今日新玉の年のはにめぐむ若木の春はきにけり  
立春日  
慈照院贈太政大臣

春きぬとふりさけみれば天の原日影さしいづる光霞みて  
御撰千首和歌



曉立春

道 遙 院

このねぬる夜のまを去年といつのまに木綿附鳥の驚かすらむ

立春曉

起き出でてとなふる星の光まで春にあげゆく空ののどけさ

立春天

後 柏 原 院

舊年のゆきげの雲をへだてきて空にしられぬ春やたつらむ

立春朝

後 土 御 門 院

朝戸あけていづればいづる日の影も同じ心に春やたつらむ

立春水

一 位 局

やがてはや氷もとけて若水をむすびかへたる今朝のはつ春

春 天

後 柏 原 院

霞さへたちも及ばぬ大空のいづくをはてと春はきぬらむ

初 春

智 仁 親 王

目にみえぬ山はかすめる谷川の波の音にも春やたつらむ

大納言藤原雅康

今日も猶かたへ雪ふり年と春とゆきかふ空やかすみそむらむ

山早春

後 柏 原 院

今日にあげて春とやかすみ玉すだれ雪とむかひし山は遙に

霞

春はけさいたらぬかたもあらし吹く山より山にたつ霞かな

山 霞

杉原伊賀守賢盛

をりにあはば春のたちける唐衣かけて霞まぬ山やなからむ

峯 霞

後花園院上臈

み吉野の花も匂はぬ春の色の青根が嶺やまづかすみむらむ

朝 霞

道 遙 院

わけのぼる山もいくへの朝日影霞におそき春の海原



原上霞

春の色はまだ淺茅生の霜枯に霞みもはてぬ小野の篠原

雅 康

春といへば霞もあしの八重ぶきにひまこそ見えねこやの松原

賢 盛

山かつら霞をかけてまきもくの檜原が春の空ぞよ深き

後十輪院内大臣

江上霞

萌え出でて霞む緑の玉津島入江にさむきあしのはもなし

智

橋邊霞

川づらの深きかすみにいくぞとまた言とはむ宇治の橋守

侍從中納言通勝

島霞

霞みてはうつさむ筆の跡もなし名のみ繪嶋の春のあけぼの

貞敦親王

子日

春ごとに子の日にあかぬ圓居してひくや小松の陰のはるけさ

後柏原院

若菜

紅の花にはあらでもえいづる末つみそむる野邊の七草

圓淨法皇

ひまみゆる澤邊の水踏み分けて若菜つむてふ道はまどはず

後柏原院

水邊若菜

露口すむ野澤のゆふ日かげろふのもゆるは春の若菜なりけり

道遙院

澤若菜

若菜つむ袖や友づる白妙のかけをならべてあさる澤邊に

賢 盛

根芹生ふ雪げの澤に白妙の衣手ぬれてたれかつむらむ

道遙院

春雪

春の日にふれば積りておのづから残ればなほも残る雪かな

四〇三



木残雪

邦高親王

春きても嵐を寒み消えやらで松はひさしく雪の色かな

野残雪

後柏原院

富士の根のたぐひには見じ武藏野に残るや雪の時しらすとも

餘寒月

常徳院贈左大臣

春の夜の月やあらぬと辿るまで霞みもやらで冴えかへる空

道堅法師

松風もさえこし空の春の色にうつりかねたる山の端の月

早春鶯

道遙院

またざらむあるじも知らず春の日の光にむかふ鶯の聲

初鶯

基綱

かけならで宿のこすゑの高きえにうつる初音をいそぐ鶯

鶯

後柏原院

一年の鳥の初音になきそめてわれは顔なるはるの鶯

道遙院

谷風に古巢あらすなうつりゆく花はしらじな春の鶯

東下野守常縁

春ながら氷はむすぶ谷の戸のとけて音にのみ鶯のなく

舊巢鶯

大納言藤原政爲

霞にやなほこもらまし鶯の雪の古巢は出でて啼けども

谷鶯

道遙院

谷深み花はむかしのうもれ木におのれ春しる鶯のこゑ

朝鶯

基綱

あけそむる霧よりいづる鶯や谷の戸口に聲むせぶらむ

竹鶯

後十輪院

くれ竹の去年のやどりの雪折にいまだ旅なる鶯やなく



山城守藤原政行

山里は外面の竹にやどしめて麓をめぐるうぐひすのこゑ

雪中鶯

後土御門院

鶯の雪に木傳ふ羽風にや咲きあへぬ梅も花はちるらむ

後柏原院

鶯のこゑする枝の春風にきえずはいつをまつのしら雪

邦高

春をあさみまづ咲く雪の花の枝にうつる匂や鶯のこゑ

雅康

さすがまだ里馴れぬ聲か降る雪にこぬれがくれにきゐる鶯

大納言雅俊

下折のねぐらの竹の鶯や夜深き雪に出でて鳴くらむ

道遙院

名所鶯

誰れ聞けと長き日あかず高圓の尾上の口の鶯のこゑ

鶯爲友

すゑとほく高きにうつる道しらは宿に契らむ谷の鶯

梅

直朝

道のべの花は一木の梅ながらおほくの人の袖ぞ匂へる

このねぬる袖の枕の朝露にのこる月さへ梅が香ぞする

曉梅

大納言藤原光廣

梅が香もうつつや深き曉の夢のうちなる花は咲きけり

紅梅

後柏原院

立ちよれば袖の香ふかく紅の色をもうつせ梅のした風

梅風

さそひきてひとへに匂ふ春風や一木の梅の花にまさらむ

梅薫風

稱名院右大臣



春風は色香のなきを心にて咲くより梅のおのが物なる

梅香留袖

政 爲

梅の花袖より袖のうつり香を袖より袖に我れはとめけむ

道 遙 院

うつしてもかへらむ程の大空におほふもをしき袖の梅が香

軒 梅

後 十 輪 院

春の夜のみじかき軒はあけそめて梅が香しろき閨の朝風  
すだれまく大宮人の袖の香にあはせて匂ふ軒の梅が枝

窓前梅

道 遙 院

ともし火の花もさながら梅が香の光に匂ふ窓のさよかせ

窓 梅

後 柏 原 院

匂へなほさしいる月の深き夜に花の香さそふ窓の梅が香

里 梅

後 土 御 門 院

袖ふれば人をや忍ぶ里はあれてふりぬる軒も匂ふ梅が香

道 遙 院

言の葉の花ぞむかしの春になほ匂ふはつせの里の梅が香

行路梅

雅 康

梅が香にまたゆく駒ををりかへしおよばぬ枝に心とどめつ

露暖梅開

いつしかと軒端は春の霜きえて梢のつゆに咲ける梅が香

残雪半藏梅

後 十 輪 院

西にこそ秋みし梅の同じ枝もわけてのこれる雪に咲くらむ

南北梅花

参議藤原濟繼

思ひやる難波あたりの春風をみやこの梅にいそぐ頃かな

政 爲

こしの雪吉野の花も色に出でて梅咲く枝のいづれをかみむ

御撰千首和歌

四〇九



柳

直

朝

四一〇

うちかすむ柳の絲や佐保姫の朝けのまゆのみだれなるらむ

岸柳

道遙院

岸かげに春ゆく水はあるよりもなほ青柳のなびく河風

江畔柳

後土御門院

かづきする蜃も入江の夕なみに柳のかみもみだれあひつつ

常德院

かげうつる入江の水もうき草のうくかともみればなびく青柳

雅康

江にあらふ春の錦やはづるらむみどりぞわたる青柳のいと

雅俊

舟つれて入江の岸の青柳やつなぐにもあらぬ絲やそふらむ

月前柳

後柏原院

ぬきとめぬ柳が枝にうつりきて月もみだるる露のしらたま

巖

道遙院

春山の空は木の芽もげぶり立ちもえて名にあふ下巖かな

春雨

澤にふる水かさはしらす春の野のみどりは雨にまさる頃かな

直朝

春雨はそのいろとしも見えざりし霞のしたの露のわかき

庵春雨

道遙院

草の庵もめぐみにもれぬ春の雨ふるにかひある世を仰ぐなり

草漸青

ふみしだく芝生がもとも薄緑日をへて深くそむるいろかな

春草

後十輪院

さえかへる野は若草のうらわかみさらにや霜に結ぼほるらむ



春 駒

こゑいさむ駒やしるらむ花山のむかしの春にかへるみちをも

初春待花

道 堅

雪の中におもひしよりも春のいろを待ちえておそき山櫻かな

初 花

道 遙 院

鳥の音もほころびそむる梢よりほのぼの匂ふ花の色かな

光 廣

咲きそめてなほめづらしき心かな去年は見ざりし花の色かは

花

後 柏 原 院

蘆垣のよし野も近き色香かな春の雲井の花のしらくも  
思ふかなさくら一木をなべて世に花といふ名もはぢぬ色香を

道 遙 院

あだなりと思ひもすてぬ春ごとのこころぞ花にみえてくやしき

のどかなる春の光にうつせみの世をわすれたる花ざかりかな  
咲きしよりみれば思ひし理こともちりまがふ花にかきくらしつつ

直 朝

久方の月は霞の春の夜に花のひかりぞさやかなりける  
とふ人のありとも春はわがやどの花ちる庭にあとやいとほむ  
山櫻まづ見にゆかむあらしの友さそふまに散りもこそすれ

待 花

圓 淨 法 皇

待たじただ思ふにたがふあやにくの世のことわりに花や咲かぬと

道 遙 院

春ごとに思へばよしや待つ人にあらそひはてぬ花のこころは

尋 花

基 綱

わけつつぞ今日こそみわの山櫻はなもたづぬる人やまつらむ

山 花

後 柏 原 院



色も香もうつりにけりな山ざくら花よりつづく峯のしら雲

智 仁

咲きおくる風のほひは吉野山花にいるさのしをりとぞなる

濟 繼

よそにして花に恨みしつれなさを嵐にかこつ春のやまかせ

道 堅

山花未遍

ふかからぬ春にさきだつ花もあれなほ面影はみねのしらくも

後 柏原院

山家花

鳥の音におどろかされて柴の戸の花も咲きそふ春をしるかな

道 遙 院

峯 花

昨日までところも去らぬ峯の雲とおもへば花に風やたつらむ

後 柏原院

遠峯花

峯たかみ去年のふる雪おもひ出でて花をぞたどるけさの春風

花盛開

稱 名 院

花よいか言の葉ぞなきけふこすばとばかり思ふ心のこして

盛 花

道 遙 院

雲をけち雪をうづみてまがひこし色もおよばぬ山ざくらかな

見 花

後 柏原院

いにしとし忘れぬ花の面影もいまの色香にとほざかりつつ

光 廣

むかひ見る色香はあやし咲きぬるも花の上こそ心なれども

賢 盛

またもこむ春をぞ契るなれなれしいのちながさも花に忘れて

朝見花

後 柏原院

あぢきなきあだなる花の上にこそなほ下露をおきとめてみる

閑見花

政 爲



つくづくと花見しをれば山彦のこたへきくべき音だにもなき

見花忘老

道 遙 院

朽木にもたぐふ姿はさもあらばあれ心は花にうつしはてにき

雅 康

心だにあかずはよしや咲く花のかげの朽木と人はみるとも

大納言爲廣

まなぶさへおろかなる身を春はなど花に光の陰おくるらむ

霧中見花

道 堅

思ひたつ心やゆかでみよし野の花の雲路にわれをまつらむ

朝 花

道 遙 院

よるの露もひかりをそへて朝日影まばゆきまでに匂ふ花かな

終日對花

法印玄旨

朝日かげいつのまにかはうつりけむあからめもせず花に暮して

春夜花

雅 俊

下臥のまくらやまちし春の夜のこてふの夢も花にとふなり

夜 花

政 爲

散らばまた花に移らむ恨までかすめる月におもひわびぬる

月前花

後 柏 原 院

花も月月も花なる光にていづれみむとはおもひしもせじ

春曉花

山櫻あくる光をいまに見む夜ふかきかねの花にかすめる

庭 花

智 仁

人目さへ稀なる庭にさくら花いかにしりてか風のとふらむ

栽 花

常 徳 院

移しうゑて君が御垣に咲く花や千代の春<sup>へ</sup>みるかざしならまし

道 遙 院



うつし世を三代の雲井の春の花われもなれぬる數に忘るな

翫花

十輪院

山ざくらに心の花にそむほどを何にうつして花にみてまし

基綱

ながめこし遠山鳥の言の葉もあかぬさくらに色をそへつつ

折花

三光院内大臣

立ちかへり風や恨みむをる枝にさそふは花のまたも咲かまし

基綱

心なき名やあらはさむ折りかざす花に隠るる老はありとも

野徑花

後柏原院

狩ごろも野原の露にかたしきて花に一夜の夢やむすばむ

故郷花

道遙院

里はあれぬ見ざらむ後の春をさへたれに契りて花をうゑけむ

通勝

ひとりのみながむる花の夕ぐれに身をふる里の春やしるらむ

道堅

咲く花のけふの嵐に身をなして思ふもかなしふる里の空

未飽花

後柏原院

(御製闕)

野花留人

道遙院

立つ事やいとどかた野の春ならむたえて櫻のほかに咲かずば

依花待人

基綱

心なきわがことよりもわが宿の花はいかなる人をまつらむ

古寺花

道堅

世のうきをまじをまたやあひみむ泊瀬山いのりし道は花ぞふりしく

古溪花



花ゆるゑや風のつらさもうき世とてまたすみすてぬ谷のした庵

瀧花

後柏原院

瀧の絲のみだれに風の吹きくるや花のしがらみせくかたもなし

湖上花

道堅

あさがすみさき浪ちりてゆく水の海吹く風に花の香ぞする

川邊花

くれゆけばただ春風の音羽川おとにききても花ぞかなしき

橋下花

わすれずや花に露ちる夕ぐれのもみちのはしの秋の村雨

嶋花

道遙院

いつの世の新嶋守かうゑおきてかかるところも花は咲くらむ

花枝

政行

見る人もかなたこなたの家ごとに枝ながらちる山ざくらかな

花主

後花園院上臈

春はただ花をあるじになしはててとはれぬうさ<sup>きい</sup>もみにも恨みじ

花匂

基綱

風の傳もとほ山ざくらかすむ日に心に匂ふはなをみるかな

惜花

常德院

たが世よりあだなる色に咲きそめて花に心をつくしきぬらむ

基綱

染めざらばうつろふ事もとばかりを心にかこつはなの色かな

落花

後柏原院

うらやまし花はひさしき盛かな世世の春風吹きつたへつつ

三光院

さそふには思ふ袖もやありなまし日數ぞ花のあらしなりける

基綱



吉野山おちたぎつせはいろそひて梢にきゆる花のしら雲

落花入簾

後柏原院

玉すだれ涼しく風にちるとみてあるべき花の袖にとまれる

庭上落花

光 廣

あかずとや玉しくうへに春風のさくら吹きまく九重のには

夕落花

後十輪院

ちるままに枝には花の色消えて夕ぐれふかき庭の木のもと

落花風

道 堅

雪とのみ見しも□□なでとふ人のあとなき花に残る山風

残花

道 遙 院

ありてうき世をしる花の中にまた心ながきもあはれならずや

残花

通 勝

咲きのこる一木の色に見せてけり四方の春をもくるる春をも

残花少

後柏原院

つれなしとあまたに見ばやさそひゆく風におくるる花の心を

歸雁

道 遙 院

かへる雁さすがにとまる一つらもみやこの花にいかでなくらむ

こほりゐし入江の雁も春の波かへるをみてやおもひたつらむ

爲 廣

ゆく雁もこころやよらむ月白く水みどりなるはるのうらかせ

夕歸雁

賢 盛

よをかけていくへかこえむ夕霞かすめる峯にむかふ雁がね

峯歸雁

通 勝

わけてこし峯の朝ぎり春はまたはれぬ霞にかへるかりがね

遠歸雁

雅 康

もろこしのから櫓をおしてゆく船のはるかになりて歸る雁がね

御撰千首和歌



浦歸雁

逍遙院

雪のこる比良のねおろし心あれや浪路はるけきかりの翅に

歸雁似字

宗 祇

これやその別とかいふ文字ならむ空に友なき春のかりがね

桃花

通 勝

ももの色の桃にはあらで三千年の咲くてふ種や仙人のやど

春月

後柏原院

(御製闕)

圓淨法皇

なきくらす鶯の音によろこびの色をそへてもいづるつきかな

光 廣

まちえてもおぼろにみゆる春の夜の月のかつらの花ぐもりかも

基 綱

しくものもなき故郷をかすめても春にいろそふ月の影かな

賢 盛

春もなほなぐさめかぬるながめよりかすみやそめし更科の月

獨見春月

濟 繼

たれならぬ影を友なるなぐさめもすくなく月の霞むよなよな

春曉月

稱 名 院

かすめども鐘のひびきは高砂やをのへの西につきはうもれて

柴の戸をおしあげがたの春の月かすまぬとても涙にやみむ

勾當内侍

横雲にかすみもかかる山の端につれなくいづる有明のつき

春月幽

雅 俊

いでぬまもそれとも見えぬ山の端のかすみは月の色にほのめく

御撰千首和歌



春 曙

圓淨法皇

見しままの心にとまる面影やたがならはしのはるのあけぼの

玄 旨

めできつる花も紅葉も月雪もかすみにきゆるはるのあけぼの

道 遙 院

幽栖春月

今は身のすむともなしの宿の月うき世にもれて霞ますもがな

邦 高

喚子鳥

山ふかみ霞にむせぶ呼子鳥おもふこころのおくをとめばや

圓淨法皇

雲 雀

ゆふひばりわがゐる山の風はやみふかれて聲の空にのみする

玄 旨

のどかなる影をちぎりて春の日のおつればおつる夕雲雀かな

雅 康

春日遅

大空の山のはもがなくれやらぬ春の日影のなかにやどさむ

後十輪院

遅 日

けさのほどひるまの空をきのふかたとどるも老の春の日長さ

道 遙 院

遊 絲

くりいだす人こそあるらし遊ぶ絲にひかれて雲の上をとばばや

後十輪院

毎山有春

春のいろの外山はいはじ白かしの枝にもみえて雪ぞのこれる

江山多春興

伊駒山花のはやしもなには江のはるにへだてぬ波ぞかすめる

道 遙 院

春歸日復暮

くれにけり春よいづくにゆく鳥の入相のかねのみねの白雲

政 爲

春 河

春雨にかくはまさらじ吉野川雪解の水やなほのこるらし



蛙

直

朝

雨ふれば山田のつつみ水越えて草の葉するに蛙なくなり

杜若

後十輪院

まじるともみざりし池の杜若花にさきてぞあやめわけける

直

朝

いかなれば淺澤沼のかきつばたこきむらさきに花の咲くらむ

躑躅

道遙院

日のひかり峰にもをにもへだてなく匂ふは木木の下つつじ哉

藤

圓淨法皇

ゆく春も過ぎがてにみよ藤浪に今たちこゆる花はあらじを

留春不駐

稱名院

山川のはなのしがらみ雲かすみなににかけてか春はとまらむ

旅三月盡

邦

高

ゆく春はけふをかぎりのささ枕ふしうき旅は一夜ならぬに

三月盡夕

後柏原院

くれてゆく春よりほかにいろもなし入相のかねも雲もかすみも

閏三月盡

光

廣

いかにせむことし三月をそへてだに花に思へば春のすくなき



夏

首 夏

道 遙 院

夏とやは若葉の木木の花もなほありとこてふの尋ねてぞゆく

旅首夏

雅 俊

もろともにゆく旅ながら夏もなききのふの春にけふは遅れて

更衣

をしみつる春のなごりを昨日といひ今日は衣をかへまくもうし

直 朝

なれなれし春をのこして夏衣かへてもはるは花の香ぞする

賢 盛

ぬぎかふるかとりうらに立つ波の色もすすしき白重かな

霧中更衣

政 爲

露けさはかへてやまさる旅衣野山のつゆのわすれがたみに

餘 花

十 輪 院

ちるとてもいそがざらなむ山ざくら春におくるる心長さに

遅 櫻

道 遙 院

夏きても青葉の中の初花をおそきさくらの名にや立つべき

新 樹

ときは木の下葉も今はちる花のあとは嵐のしげる山かな

卯 花

後 柏 原 院

色はいさ匂なしとや卯の花のはるの梢に咲きおくるらむ

道 遙 院

偽のなみこそこゆれ卯の花のさける垣根のすゑのまつやま

賢 盛

こころなき賤が垣根に匂ふなりあはれあなうの花の契や



卯花似月

道 遙 院

四三二

久堅の光をちらす卯の花やこのよの月のかつらなるらむ

後土御門院

かれはつる人目を冬の草葉にて雪にこもれる宿の卯の花

葵

光 廣

宮人のくろかみ長きあふひ草いく年年をかけてきつらむ

郭 公

道 遙 院

たのめおくものとはなしに時鳥くるる夜ごとに猶またるらむ

直 朝

待ちしよりねぬ夜の空のひと聲を夢とはきかじ山ほととぎす

待郭公

後柏原院

一こゑにあくるもしらで郭公またるるほどやながき夜の空

圓淨法皇

ほととぎす心のまつのみさをにもくらべぐるしき聲のつれなさ

久待郭公

ねになきて思ひをいでよほととぎすまたれし程のあとの日數に

初聞郭公

またでこそ聞くべかりける郭公さてや心もおもひしめけむ

聞郭公

玄 旨

ほととぎす聞きしとやいはむうたたねの夢の界のよはの一聲

人傳郭公

聞きつともかたるを人のいつはりになすまでうとき時鳥かな

夕郭公

いかにききいかに見てまし時鳥空ゆくつきのゆふぐれの雲

曉郭公

道 遙 院

かたらへよ有明の月をたれゆると待出し空に山ほととぎす



後十輪院

玄 旨

ありあけの月のゆくへのひと聲もなほ世にしらぬ時鳥かな

雨中郭公

むら雨のあめうちはぶきあま雲のよそになりゆく郭公かな

野郭公

圓淨法皇

ききそめてあかぬ野中の郭公みおくるほどぞ空にひさしき

里郭公

智 仁

たが里にはつねとはまた聞きつらむゆくへのほのかに鳴く郭公

馬上郭公

およぶべき雲井ならねど郭公駒ひきむけてしたふこゑかな

海郭公

道 遙 院

浦とほくかへる波をも郭公うらやましとやなきわたるらむ

海邊郭公

後柏原院

ほととぎすあかずとや聞くとまやかた花も紅葉もいまの一聲

郭公稀

圓淨法皇

うとくなるおのがなく音も色みえは青葉の花のやまほととぎす

夜廬橋

道 遙 院

たちかへりしのぶる聲は時鳥世にもれし名やさらにくやしき

夜廬橋

智 仁

たちばなの匂ぞしらぬ昔をもかたるばかりの夜はの手枕

軒 橋

道 遙 院

匂ふより昔わするる草ならでこはしのぶなり軒のたちばな

故郷橋

後柏原院

里はあれぬたれかはありて袖の香を花たちばなにもた残さまし

空しくやあれにし床に匂ふらむはらふ人なき軒の橋

道 遙 院



對橋問昔

後十輪院

むかしをばとへどしら玉つゆちりて袖の香しめる軒の橋

政 爲

橋は遠きしるべに匂へども見し世がたりは我れもしてまし

廬橋子低

稱 名 院

花ちりて面おもげなる橋に霜の林も見るここちして

早 苗

直 朝

田子のとる早苗の露の玉だすきかけて心に秋やまつらむ

門田早苗

道 遙 院

山本の門田の畔のやなぎかげ夕日をよそにとるさなへ哉

菖 蒲

賢 盛

枕にもとりあへぬまの菖蒲草引き結びつる夢のみじかさ

五月雨

圓淨法皇

梢にもうをもとむべし磯馴松波にしづめる五月雨の比

直 朝

風あれて月もるほどはふかざりし閨の板間の五月雨の比

玄 旨

五月雨の比はしなとの風とてや吹きや拂はぬあまの八重雲

水 鶏

後十輪院

くひなをや驚かすらむ老が世を猶出でがての門させりとて

寐覺水鶏

道 遙 院

夢よりも仄に聞きて驚けばただここにしも水鶏なくこゑ

照 射

人の身は照射によるの鹿ばかりはかなき物をよそにやは見る

鶺 鴒 河

光 廣

篝火にたきもけたすば鶺鴒飼舟迷はぬ罪の身を照さばや



蚊遣火

後柏原院

人の上になして見せばや蚊遣たく宿にふすぶる賤が思を

逍遙院

たえだえにけぶりにぎはふ聲もなし秋風ちかき宿の蚊遣火

隣蚊遣火

政為

蚊遣火はたかぬ軒ばにすだき來て煙のほかに曇る一村

螢

基綱

亂れそふ螢やすがる月おそき軒のしのぶの露のひかりは

野螢

逍遙院

神だにもけたぬ思を行方とやふじの裾野に飛ぶ螢かな

叢螢

圓淨法皇

くちはてむ後こそあらめ草の上の螢や何のもえて行くらむ

逍遙院

秋をまつ草のしげみの露の上にひかりを花と飛ぶ螢かな

川螢

光廣

風にもえ浪にも消えぬ思かなさてや螢の身さへこがるる

水邊螢

基綱

とぶ螢たつ川霧のほかにまたうきて思の有る世見せつつ

雨中螢

政為

空高くのぼる螢は雨くらきよるとて消えぬ思ならめや

螢似露

直朝

飛ぶほたるみぎはの葦のよなよなにおかぬ露ちる風の涼しさ

蟬

宗祇法師

暑き日のかげよわる山に蟬ぞなく心の秋ややがて苦しき

夏草

後十輪院

庭の面にはらふもおなじ種なれや心にしげる葎よもぎふ



瞿 麥

基 綱

籬にもやしなひたてつたらちねはわが黒髪やなでしこの花

庭床夏

邦 高

風のみや塵もはらはむ故郷とあれゆく宿の常夏の花

あれぞゆくおいさき遠き常夏の頼む籬もひもみゆるまで

雅 康

蓮

後 柏原院

涼しさを蓮の上になきかねぬ風のたち葉も水の浮葉も

池 蓮

直 朝

池の面の蓮のうきはの繁りあひて水の濁れる影のなき哉

夕 顔

後 柏原院

花におく露の光はほのめきて入日すすしき夕顔の花

政 爲

夕顔のさける垣ねをゆく水もかけさへ花の色にすすしき

夕 立

稱 名 院

時のまに暮れぬとみつる山の端に入日をかへす夕立の空

常 縁

風早し高根の雲をはじめにて軒端におほふ夕立の雨

山 夕 立

勾 當 内 待

山陰の雲にこたへてなる神の響もたかし夕立の空

遠 夕 立

後 柏原院

吹きおくる山風ならじ涼しさの雨にまたる夕立の空

政 爲

雲くらく山のはとほき夕立に日影ながらに雨はおつらむ

旅 夕 立

道 遙 院

夕立にくれぬと思ひし宿出でてゆけば山路の日こそ高けれ



夏 月

うきてよるみるめ涼しくすみ渡る月もみなみの浦風ぞふく

後 十輪院

いろきゆる真砂のよるの霜をし涼しき月のあくる光に

賢 盛

夏は唯ささで眺むる宵のまにいくよかあけし横の戸の内

後 柏原院

蟬の聲しぐるる跡にまち出でて木の葉色づく月ぞもりくる

雅 俊

蟬の音のはやまの梢くれそめてもりくる月も薄き影哉

通 勝

難波渦あしのふしのま程もなくかりねにあくる夏の夜の月

後 柏原院

夏月涼

夏月易明

夕闇の庭の篝火たきけちて木陰すすしく月になりぬる

沙月忘夏

濟 繼

秋の月霜おく庭と見し影や明けて涼しき露の真砂地

夏 田

後 柏原院

小山田や早苗とる日を夏草の事しげき世の例にぞ見る

夏 海

住の江の浪にも夏を忘れ草松を秋風いまよりや吹く

扇

後 奈良院

草木にもいつまちいでむ秋ちかき風の宿は閨の扇を

玉階夜涼

玄 旨

はしの上はいかに涼しき月まちて猶おばしまによるの高殿

氷 室

道 遙 院

冬をのみおのが常磐の氷室山花も紅葉もいかにさかなむ

御撰千首和歌

四四三



泉

宗

祇

山城の泉のこすげそれながら岩しく庭にまかせてぞ見る

納涼

後柏原院

夏ごろもひとへに秋と思ふまに袖ふくほどに風ぞ涼しき

道遙院

涼しさの音にくらへば落ちたぎつ松の嵐といづれ高けむ

水邊納涼

政為

なつむしも思ひやられてよひよひの涼しきかげや庭の遣水

麓納涼

常德院

風かよふ麓の野邊の葛かづらうらはの露に秋ぞ近づく

入道前左大臣

山の名の朝日はとほくかたぶきて麓すすしき宇治の川風

政行

山風にかよふ麓の檜の葉の馴れまさるべき夕すすみ哉

御祓

直朝

御祓川ながるる水に夏はゆく秋はこえくるせせの夕波

貴賤夏祓

基綱

數ならぬ淺ちが露の御祓とてぬかづく業を神はへだてじ

六月祓

道遙院

飛鳥川いつか思の淵ならでうれしき瀬にも御祓してまし



雑

山 榊

常 徳 院

かぐ山や神代をかけておく露の玉ぐしのはにみがく日の影

社頭榊

後 柏 原 院

松もいさ幾度霜にあらはれて神代おぼゆる真榊の影

松 檜

杣山や松は稀なる中にしてならぶ梢や檜原なるらむ

杜 柏

慈 照 院

柏木のかげしめはへて夏にしもすむや葉守の神なびの杜

濱 楸

邦 高

よる浪やまた誘ふらむ濱楸ふく浦風に散りし落葉は

峯 松

峯におふる松ときかねどかへるべき君が治むるときはかきはに

庭上松

雅 親

風をきき雪みむための庭の松わするる千代もこもる色哉

砌下有松

後土御門院

すみすてし雲居の松の年をへて木高き色はよそに見えけり

松風入琴

後 柏 原 院

琴の音は空にやかよふおのづから風のしらべを松にのこして

池上松風

直 朝

たちならぶ池の汀の松風は風と波とのやどりなりけり

名所松

後 十 輪 院

仕へつつ年もへにけり高砂の松の思はむ身をば忘れて

竹

道 遙 院

すぐなるを心としるも呉竹のうきふしあれや世にあはずして



窓 竹

後 柏原院

雨の音雪のこゑにも夏冬のかげこそあかね窓の吳竹

竹風如雨

雅 俊

おつるとも雫は見えぬ村雨の音うちさやぐ竹の下風

岡 篠

道 遙院

みまくさにこれをやかりしかの岡に末葉みじかき篠の一村

簷忍草

後 柏原院

しのおをも草ばにつけてかなしきはふるき軒端の世世の面影

名所山

道 遙院

なべてよのちりよりなれるたぐひかな國の始の淡路島山

名所關

賢 盛

都おもふ夜のまくらの山風や夢もなこそその關のせきもり

殘月越關

政 爲

あかでゆく足もこころの戸ざしかな關の梢の月のあけばの

名所渡

道 遙院

身のはてのいかなるとにたつ波のあはれ静けき時のまもなし

名所瀧

光 廣

こほりとは月やみすらむたえす猶おつる音羽の瀧の白絲

布引瀧

後 柏原院

雲霧の空につつみて白ぎぬのはたはりせばき布引の瀧

飛瀧音清

稱 名院

空よりやあまの河原に吹く風の音をもおとす峯の瀧つせ

瀧水飛絲

道 遙院

ひとすぢに心をあらへよにそむる色に亂るる瀧の白絲

雲

後 柏原院

ちりひぢの山より出でて一すぢの雲の行方や空に滿つらむ



夕

道 遙 院

四五〇

けふ過ぎぬとばかりいひて幾度の入相の鐘にみを忘るらむ

鐘

さても猶ながきねぶりよ山鳥の尾上の鐘は驚かせども

夕 鐘

光 廣

花紅葉ちるてふものをけふことにきき驚かぬ入相の鐘

月前鐘

後 柏 原 院

雲にあふ曉月にもれ出でてひとりくまなき鐘のこゑ哉

古寺鐘

山ふかみ雲よりいづる入相の聲のひびきや峯の松風

吹きのぼる谷風みえて初瀬山夕の鐘に雲のかかれる

玄 旨

誰もみな命はけふかあすか寺入相の鐘に驚くはなし

遠寺晚鐘

常 縁

たえだえに尾上にひびく入相や寺ある方の奥の山風

夜涙餘袖

後 十 輪 院

嬉しさもうきも寐覺の思出にひとつ涙ぞ袖におきあへぬ

寐覺雞

政 爲

なく鳥の空音もあれやよなよなの寐覺たがへぬ老の枕は

里

道 遙 院

すむうちもあはれ深草今はとて見ざらむ後を思ひおく哉

故 郷

今はそのならの飛鳥も故郷をあかずとみけむ跡としもなし

河

直 朝

すみだ河むかしいかにと言とへば渡らぬ波にぬるる袖かな

橋

道 遙 院



かけていはば遠き道かは人の世も神代のままの天の浮橋

温泉

わきかへり岩もる水よいつの世の思の色に出湯なるらむ

春秋野遊

雅俊

董つむゆかりの野邊の紫にこれも色こき藤ばかま哉

晴後遠水

後柏原院

そらの雲かへり盡きたる山ぎはの水（水イ）一すぢや晴れ残るらむ

鷺のとぶ河べを遠み水はれて入日にすぐる秋の村雨

離別

賢盛

行く人にそふる心も都いでていかなる山をこえむとすらむ

旅

後柏原院

旅にしてしのぶ草おふる故郷はすむらむよりも亂れてぞ思ふ

ふるさとのわかれにそへて旅の宿一夜ばかりの名残さへをし

玄旨

都おもふなみだも露にあらそひて草の枕に幾夜ねぬらむ

霧旅

俊量

わが方に急ぐ心のそれながら急ぐは旅のならひなるらし

賢盛

都人夢路たどるなするがなる山はうつつにふみまよふとも

旅行

後柏原院

旅にして見る□□逢坂のあらしの風のゆくすゑ（雲イ）の空

夕旅

道遙院

夕こりの岩がねさむし我が馬の黒髪山は木木のした露

山旅

智仁

白雲のたなびく方をやどりぞと頼むばかりにゆく山路哉

野旅



なれなれて夢みるまでに草枕引きむすびたる武藏野の原

野宿

後柏原院

峯の庵もとはましものを知らぬ野の草の枕にちかき山風

賢盛

野への露いくよしくらむ假寐する我が身も草にむすぶ枕は

風破旅夢

政為

こし方のたよりの風と思ふにも夢にはつらき物にやはある

旅宿風

直朝

行きくれてこよひ篠屋のふしのままにかりね苦しき風渡るなり

月旅宿友

道遙院

おほかたの露にはなれし月もなほ旅ねの袖をあやしくぞとふ

海旅

智仁

舟人に任せてゆくもおぼつかぬ四方の山さへ見えぬ波路を

旅泊重夜

後柏原院

浪枕なれぬるままに寐ぬるよのうら珍らしき夢のかよひぢ

寄月旅泊

圓淨法皇

漕出でてあすの波ぢも言とへば今宵の月はみつのとまりを

不不二不

智仁

ふじのねはただ雲風をすがたにてもとみし山の面影ぞなき

後十輪院

不二のねは雪のひかりに明けそめて麓のくもに残るよはかな

光廣

年をへて忘れぬ山の面影もさらに忘れてむかふ不二かな

玄旨

久方の空につもれる白雪や明けゆくふじの高ねなるらむ

後十輪院



清見がた岩うつ波に聲そへて磯つたひゆく山のまつかせ

羈中秋

後柏原院

旅衣うつるともなきころにもさすが野山の秋のいろいろ

月羈旅友

逍遙院

誘ひくる故郷人のおもかげに月こそ旅の露をそへけれ

羈中野

常德院

假寐するゐなの篠原一夜だに結ばぬ夢をとふ嵐かな

羈中關

後土御門院

ゆくすゑを關もる神に祈りつつけさこそこゆれ逢坂の山

光廣

關の名の霞もつらしかへりみる昨日の空もけふはへだてて

羈中枕

逍遙院

まくらとて頼むも岩木ころありて又しる人もなき山路哉

山家

とふ人をふもとにそれとみ山にもしばしまたるる峯の庵かな

賢盛

奥山のふかき心はくみなるる水の静にすみてこそしれ

玄旨

おのづからあやしの賤が言の葉をうつして友となるる山里

山家曉

通勝

鳥の音の聞えぬ里に鳴き馴れてあかつきしるき猿の一聲

道堅

しづかなる柴の外山の寐覺にも猶おもふとや有明の空

山家夕

基綱

我れのみと思ふ軒端の山風に契らぬ雲やまたかへるらむ

山家夢

光廣



すみはてぬ柴の戸ぼそを夢はただ覺めても同じ峯の松風

山家嵐

後柏原院

散る花ももろき木の葉もかくてみむみ山の嵐吹くに任せて

圓淨法皇

たへてやは太山の庵に聞きそめしその夜のままの嵐なりせば

基 綱

吹きとほす賤が松がきあらはにて梢にとまる嵐をぞ聞く

山家風

山深みつひにもみぢぬ松風や色にそむよの夢さそふらむ

山家雨

慈照院

いにしへも思ひのこさぬ山風によるの雨きく草の庵かな

爲 廣

山深み柴の戸たたたくよるの雨を袖にこたふるわが涙かな

山家路

十輪院

音するも淋しかりけり山里のいはねの道をかへる柴人

山家苔

道遙院

柴の戸は花ももみぢも幾度か拂はぬ苔の上に朽ちなむ

山家水

直朝

柴の戸にまだすみ馴れぬ山の井やくみだにしらぬ心くらべむ

山家戸

雅康

山ふかくすめる心をとぢはてむ柴の戸ぼそはあらはなりとも

爲 廣

たたきぬる尾上のあらしたゆるまは明けても雲のとづる山里

賢 盛

さしこむる岩の樞も苔むしてとふ人かたくなき山ぢかな

山家棧

邦 高



住む人の心ぼそさもしら雲に一すぢのこる谷の柴ばし

爲 廣

すてし世の道にあやうくならばすば渡りやかねむ谷のかけ橋

山家別

道 遙 院

わかれゆく末もさこそと夕暮のまがきはやがて山の下道

山家鳥

雅 俊

里とほみ八こゑはきかでかへる夜にみ山の鳥ぞ軒にこととふ

山家蟲

爲 廣

はかなしや軒にすがくる山里のみこそかりなるささがにの絲

山家人稀

稱 名 院

山里はわが跡ばかりふみ出でてまたまよふべき道だにもなし

濟 繼

とふ人のありとも誰れか答へましなかばおぼゆる柴の樞に

山家送年

政 爲

柴の戸をよしかりそめに思ひつつ住みあらしても幾年の空

閑居待友

圓 淨 法 皇

いま更にとふべき誰れをまつの門さすがにみつの道を残して

樞 夫

道 遙 院

まさきちる嵐や袖にさむおもひからしたきぎすくなくかへる山人

樞路日暮

濟 繼

岨づたひひとりびとりのかへるさに柴こる山の日は暮れにけり

樞路雨

後 十 輪 院

ふる雨に暮れぬさきにといそぐらし眞柴すくなくかへる山人

田 家

後 柏 原 院

もり捨てし後もやかよふおのづから賤が門田にちかき庵は

圓 淨 法 皇



おもへ世は玉しくとても秋の田の假庵ならぬやどりやはある  
光 廣

年もへぬさはならはしの身なりけりあはれ田面のひとつ庵に  
基 綱

かりてほす田面の庭のいな雀もとめあるみはさわがしのよや  
雅 康

板まあらみまたたく影にめもあはで山かせみゆる閨の灯  
田家雲 道 遙 院

秋はてて庵あらはなる小山田の雲ぞ稻葉の色に残れる  
窓燈歎消 基 綱

まだ深くそむけてあふげ燈にかべの草葉も露ぞ消えゆく  
曉 道 遙 院

ゆめに見し故郷人のかへるさもいかがあらしのしののめの空

常 縁

おのづから覺むる夢路や更くる夜の鐘よりさきにしるべなるらむ  
曉 山 後 柏 原 院

めぐりゆく星のひかりに山みえて曉くらくすめるよの空  
曉猿叫峽 濟 繼

ましらなく有明の月の山かげにおちゆく水の音もすすしき  
曉 夢 慈 照 院

きぬぎぬにつらきのみかは鳥のねに昔をみつる夢も忘れぬ  
通 勝

秋はまづ夜ふかきほどにねざめして夢をも老は曉ぞ見る  
冬夜夢 一 位 局

しもむすぶ夜寒の床の山かげにこほらぬ夢もとけてやは見る  
寄衣雜 道 遙 院



おもひそめし心のままのうれしさはつつむにあまる墨染の袖

寄舟雑

ふくや世の風やいづこと棹さしてをしへむ和歌の浦人もがな

寄橋雑

谷深みはしを出でじのちかひだにあればある世を何歎くらむ

寄木雑

やどり見む跡なつかしみよよへてもきることなしの陰仰ぐなり

寄苔雑

埋までも何ばかりなる名にもあらし深山の苔に身はすませども

寄水雑

一かたにすまば住むべき山水を心のちりの又やけがさむ

眺望

あかす思ふ袖のうらにや玉津島入江の月のおきつしら波

ひととほり夕日にはれて目にちかき山よりたかき遠の川水

河眺望

圓淨法皇

いにしへの契にかけし帯ばかりひとすちしろきせせの河水

海眺望

道遙院

いつとかはゆふべ曙はる秋のただみるたびに浦のはつしま

海路

後柏原院

舟出するおひてもあれな浦ちかきしほひの名残うら風もなし

かへるにやおのがうらうらみもわかむおなじ波路の沖つ舟人

鹽屋煙

あまの住む鹽やく里ははるかにてけぶりの末にくるるうら風

貞敦

もしほ火をたつるけぶりはうき草をわぶとはなしのすまの蜃人

漁舟連波

政爲



おくれじの心や追手あまをぶねなみに一葉の數ぞそひゆく

滄海雲低

濟 繼

おきつかせ汀によせぬしら波やかげをひたせる空の浮雲

政 爲

一むらの雲はさながら苦おほふ舟かとも見る沖つしらなみ

鳥

道 遙 院

おやを思ふ心わするなからすてふ鳥もうば玉よはになくなり

鶴立洲

後十輪院

むれきては水なき空の友づるも川せの波の聲をそへける

江雨鷺飛

後柏原院

墨がきのただ一筆のほかなれや雨おつる江をわたるしら鷺

披書逢昔

道 遙 院

しるしおく筆に何かはます鏡手にとりて見ぬいにしへもなし

對鏡知身老

後 柏 原 院

ますかがみ我れと忘るる老が身のこころをてらす影もはづかし

往事如夢

政 爲

今ぞしるいやはかななるいにしへも昨日の夢といふはならひを

道 遙 院

ぬるがうちに見るのみちかき昔にてうつつの夢は遠ざかり行く

寄舟無常

圓 淨 法 皇

世の中の波のさわぎもいつまでのみの浮舟まうぞさもあらばあれ

懷 舊

みちみちのもいものもいのたくみのしわざまで昔におよぶ物は稀にて

三 光 院

ほどちかき我がむかしさへ戀しきに老はいかなる涙なるらむ

光 廣



まだしらぬ身のゆく末も思はずや思出すやこしかたのそら

懷舊涙

道遙院

いにしへを忍ばぬほどや老人のなみだもろさをよそにみつらむ

後柏原院

述懷

さまざまの道のひとつのさかひをもふみぬ身こそまづ苦しけれ  
とにかくに歎く心ぞおろかなる身さへうきよに思ひしらすも  
よの中の我が心からみちもなし人にするべき道はありとも  
おろかなる身を歎きても一筋にすてぬ心やうきになるらむ  
我が身とてそれも心のままならぬこの世に人のうらみあらめや

圓淨法皇

後の世のつとめのほかはことなくて物に紛れぬみをつくさばや

道遙院

人の世にねがふことなる玉のをの長きも身にはうれしげもなし

なにか思ふ人にもかなし我れにおきてうかべる雲の行末の空  
思ひしる心のままにいとはずばくやしかるべきこの世ならまし  
みはふりぬ行末とほくつかへよと子を思ふみちに君を思へば  
おほけなやみなすべらぎの海山を我が物がほに民のあらそふ

雅俊

はてはてはなほざりにやと思ふまに背きもやらぬ憂世とぞなる

光廣

あぢきなくよはひはたけぬ人の身にうまれしのみを樂にして

基綱

なにかせむ今だに末の世がたりにたとへばのこるその名ありとも

宗祇

なほざりに世をば捨てじと思ひこし心ふかさぞ人におどろく

權典侍



愚なる身とも歎かじよの中にながらへはつるためしなれば

述懐多

後 柏原院

世をうらみあるはわが身をうしと思ひ人にいつかは心やすめむ

夜述懐

道 堅

寢覺してうき世をひとり思はずば夢になされぬ老や歎かむ

曉述懐

後 十輪院

山ふかく今はきくべき鳥のねをおなじねざめに待つもつれなし

寄情述懐

道 遙 院

すなほなるすがたながらにあたらしき心をえばや大和言の葉

寄月述懐

圓 淨 法 皇

よをなげく涙がちなる袂にはくもるばかりの月もかなしき

常 縁

影きよき雲まの月の秋のかけも心のやみははるるともなし

寄露述懐

政 行

うき身には秋のならひにかぎらめや心よりおく袖のしらつゆ

雪中述懐

玄 旨

流石またはらひはすてじつひにわがあつめぬ窓の雪と見るにも

寄鳥述懐

直 朝

蘆ねはふ入江につくる鳩の巢のうきながらこそ世には住みけれ

寄關述懐

政 爲

なげくぞよ岩戸の關の明けつれば身のいたづらに過ぐる月日を

寄河述懐

直 朝

よしや世はけふのうき世もあすか河わたりしられぬ末のしら波

常 徳 院

神かせや御裳濯川のきよき世にいのりし事をうけざらめやは

寄海述懐

賢 盛



玉よすることばの海のなぎさにもひろふかひなきみやを恨みむ

後柏原院

世の中にゆめぢはずぎてうつ山のゆくさきしらぬ物をこそ思へ

道遙院

天てらす神も今よりのぼるべき雲井を君にちぎりおくらし

後十輪院

ここのへのかざしの櫻いにしへにかへるはるをや神にまつらむ

雅俊

ことのはのいづも八重がきへだてなく仰ぐを神も守らざらめや

道遙院

あらはれししほの八百あひのいくへともしらぬちかひや住吉の濱

後十輪院

御幸せしむかしの秋のけふしのぶ心ぞ手むけ神もうけてよ

祈世神祇

雅俊

祈るぞよ神のまじはるちりひぢの山となるまで世をすなほにと

後土御門院

いかできて人の國までうつしけむ内外の宮のかやが軒ばを

十輪院

大原やをしほの櫻かみまつるをりしらゆふの色をそふらし

慈照院

三輪山にまづあらはれし神よかみここをよし田の杜のしめ繩

後柏原院

末とほき世を守りて九重にちかき北野に宮ゐしむらむ

常德院

みがくべき千千のことばの露になほ恵はかけよ玉津島姫

道遙院



ありとやは身をやみるべき何ごともきのふの夢のあだし世の中

釋教

後柏原院

あふげなほ名もおほぞらの名におほふ外なきがごと思ふ心を

逍遙院

老の後おなじこととていふべくは南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

ここにきえかしこにうかぶ空の雲いつを迷のはじめとかしる

人の世のちとせをまたぬことわりや鶴の林の松にみせけむ

光廣

色もかも何かみのりのもれぬべきめづる心のさもあらばあれ

基綱

九つの下品をも頼めなほ二つのさかひ出で難き身に

畜生界

逍遙院

あはれなり車をおもみなづむ牛になほあげまきの鞭をそへつつ

天人界

賢盛

すむ人の身よりてらすや月も日も及ばぬ空のひかりなるらむ

祝

圓淨法皇

しきしまやこの言の葉に何事も正木のかつらながきためしは

玄旨

をさまれる御代のしるしはしられけり君と人との身をあはせつつ

寄日祝

逍遙院

いつはとはわか木の枝にさしのぼる光も君が代に曇らめや

寄月祝

後柏原院

幾めぐりいく代の秋のそらの月くもりなきよの光みすらむ

寄月祝言

圓淨法皇

みちぬべき月におもふも行末をまつ事つきぬたのしみにして

寄述懷祝言

逍遙院

御撰千首和歌

四七五



數ならぬ身のねがひにもかなふこと君ちよませと祈る言のは  
社頭祝 玄 旨

あふひ草かけて思へばそのかみにこれも二葉の松の尾のやま  
寄道祝 後十輪院

みな人のあやふさしらぬよにぞみる道の心の深きまことは  
寄松祝 智 仁

君が代をちぎりこそおけ住吉の松の落葉の盡きぬためしに  
鶴全千年壽 後柏原院

もろ人の千年のよはひかさねてや鶴の毛衣世におほふらむ  
君恩如雨露 道 遙 院

民くさのかけてもしるや春の雨秋の露とは君がめぐみを

作者目録

- 後土御門院 成仁後花園院皇子 明應九年九月廿八日崩 壽五十九
- 後柏原院 勝仁後土御門院皇子 大永六年四月七日崩 壽六十三
- 後奈良院 弘治三年九月十五日崩 壽六十二
- 圓淨法皇 政仁後陽成院皇子 延寶八年八月十九日崩 壽五十五
- 邦高親王 一品式部卿 伏見祖 貞常親王御子
- 貞敦親王 一品式部卿 邦高親王御子
- 道永入道親王 仁和寺宮 號下河原
- 智仁親王 一品式部卿 後陽成院御子 號八條宮 桂高院
- 慈照院贈太政大臣 義政 普光院義教息 法名道禎 延德二年正月七日薨 五十六
- 常徳院贈左大臣 義尚 義政息 法名道治 延徳元年三月廿六日薨 二十五
- 入道前左大臣 公敦 法名禪空 永正四年薨 六十九

御撰千首和歌



大炊御門内大臣 信量 内大臣 信宗 息 四十六  
 道遙院内大臣 實隆 三條 内大臣 公保 息 八十三  
 稱名院右大臣 法名 堯空 天文 六年 十月 薨 七十七  
 三光院内大臣 實澄 後實 技 稱名院 公保 息 六十九  
 十輪院内大臣 通秀 准 大臣 道 淳 息 七十一  
 後十輪院内大臣 承應 二年 二月 廿九 日 薨 六十七  
 大納言藤原為廣 冷泉 大納言 為 富 息 七十七  
 大納言藤原政為 下 冷泉 祖 權 大納言 持 為 息 七十九  
 大納言藤原雅親 飛鳥 井 權 中 納言 雅 世 息  
 大納言藤原雅康 飛鳥 井 雅 世 號 二 樂 軒  
 大納言藤原雅俊 飛鳥 井 雅 親 息 大永 三年 逝 六十二  
 大納言藤原親長 甘露 寺 頭 辨 房 長 息 六十五  
 大納言藤原光廣 鳥丸 權 中 納言 光 宣 息 寬永 十五年 七月 逝 五十九

中納言藤原基綱 輔小路 祖 參 議 昌 家 息 六十四  
 侍從中納言源通勝 中 院 通 為 息 法 名 素 然 號 也 足 軒 慶長 十五年 三月 廿五日 逝 五十二  
 從三位資直 宮 小路 從 三 位 俊 通 息 參 議 藤 原 濟 繼  
 東下野守平常緣 下 野 守 昌 之 子 法 名 宗 曉 杉 原 伊 賀 守 平 賢 盛 兵 庫 允 滿 盛 子  
 山城守藤原政行 號 二 階 堂 源 直 朝 號 月 庵  
 法印玄旨 細 川 幽 齋 釋 正 廣 石 山 僧  
 宗祇法師 連 歌 師 號 自 然 齋 又 種 玉 庵 肖 柏 法 師 號 牡 丹 花 又 夢 庵 中 院 通 淳 庶 子 文 龜 二 年 七 月 卅日 死 大永 七年 四 月 卒 八十五  
 道堅法師 岩 山 民 部 少 輔 後 土 御 門 院 一 位  
 後花園院上臈 勾 當 内 侍  
 一位局 新 典 侍  
 權典侍



內閣文庫本典書

斯一冊者元和帝雖有撰集之御風望依故障不被遂寂慮自後柏原院至御在世長于此道君臣之秀歌集千首以所比撰集矣寔二百餘荒廢之道可謂再興起豈非廣大之御勳德哉最仰可貴

寶永五戊午歲季秋下浣

風觀齋長雅

平姓

氏 朝 尊 丈

# 御撰集 第四卷終

(岡田三郎助意匠) (佃製本)

大正五年六月十日印刷  
大正五年六月十三日發行

御撰集 第四卷

(非賣品)

版權所有



編纂者兼

列聖全集編纂會

東京市麴町區內幸町一丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎

東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一三二七番  
振替東京二九八八八番

列聖全集編纂會



328  
378



終